

事を避けてゐるのであるから、かゝる裝飾の矛盾を敬虔の念から考へて見れば、一層不思議な不可解な事になる。

斯く變態ではあるが、而も確實な事實なのである。然るに、凡て佛教美術史家は、之に満足な説明を求めてかゝらねばならないのであるから、之を忘れてはならない。此の説明に至つては、世尊の人格がその教團の初期に於ける崇拜の根本であるから、之に對する尊崇が、特殊の事情で、最初から何等かの形を取つたと思はれるその事情を他にしては、この説明は得難い事であらう。之には三形式があつたが、之は佛陀の遺物に三種別をなすに由るだけの事で、第一には、前に云つた茶毗の遺骨で、次いで塔下に藏せられたものである。第二には、佛在世中の持物類で、衣、鉢、杖等があり、之は種々實證を擧げて歴史的に認むる所ではあるが、此の種の記念はこゝに止まつて、夫以上に及んでゐる事はない。終りには、實跡であつて、佛陀が此土に遺された靈跡である。この靈跡については、佛陀が臨終に於て、自ら其愛弟子阿難に、尊信すべき四所のある事を告げられたとする所と、丁度關係があるの